

# ラサールの労働者アジテーション 挑戦と挫折(6・完)

## ——モラル・パニック論による分析と叙述——

篠原敏昭

キーワード：フェルディナント・ラサール，労働者アジテーション，  
労働者 kongress 運動，全ドイツ労働者協会，プロイセン憲法紛争，  
ドイツ国民協会，ドイツ進歩党，シュルツェ＝デーリチ，  
『フォルクス・ツァイトウング』，ビスマルク，モラル・パニック

[本誌第 28 巻より続く]

### 第 4 節 ラサールの挑戦とラサール・バッシングの展開

#### (iii) バッシング下のフランクフルトにおける「勝利」

ラサール・バッシングが吹き荒れた 1863 年 4 - 5 月の 2 ヶ月間にラサール自身が最も精力的に活動した都市は、ライプツィヒでもベルリンでもなく、当時人口 8 万ほどの自由都市フランクフルト・アム・マインだった。彼自身、労働者党の指導者たりうるためには、しかるべき場所でみずから勝利する必要を感じていたが、ドイツ全土にバッシングが広がる状況の下では、それは不可能に見えた。ところが、不可能を可能にできるかもしれない機会がマインガウ労働者大会によってフランクフルトに、それもシュルツェ＝デーリチとの対決という絶好の舞台とともに提供されたのである。彼はこれに挑戦した。

先にいっておくけれども、ラサールとシュルツェの直接の論戦といったドラマチックな場面は実現しなかった。シュルツェが議会活動を理由に辞退したからである。そのためラサールは単独で 5 月 17 日と 19 日の両日、フランクフルトで講演を行ない、19 日の労働者集会で勝利した。のちに彼は、「全ドイツ労働者協会の創設はフランクフルトで決定された」とよく語っていたという<sup>(421)</sup>。

では、ラサールの勝利は正々堂々たるものだったかということ、そうではないのだ。ここでの課題は、バッシングさなかのフランクフルトにおける彼の「勝利」の内実を明らかにすることにある。まずは、マインガウ労働者大会によるラサール招請の経緯と5月17日までのラサール陣営の活動を見ていくことにする。

#### a マインガウ労働者大会によるラサール招請とラサール陣営の活動

最初にマインガウ労働者大会についてもう少し説明しておこう。これは2月以降、フランクフルトとその周辺、マイン川流域の15前後の都市の労働者教育協会の会員が月に1度集まって協議した機関で、諸協会幹部からなるマインガウ労働者中央委員会によって運営されていた<sup>(422)</sup>。ラサールの招請を決めたのは、4月19日に小都市レーデルハイムで開かれた大会である。

4月19日といえば、ベルリン労働者協会がラサール反対を決議した日でもあるが、バッシング現象では比較的初期にあたる。ところで、現象末期の6月上旬に開催された第1回ドイツ諸労働者協会連合大会には、ドイツ全域48都市55団体の派遣代表が集まった。この連合大会は、フランクフルトの自由主義左派の新聞発行人レオポルト・ゾンネマンが提唱し、マインガウ労働者中央委員会やベルリン労働者協会などが5月19日に呼びかけて実現した、ラサール反対、シュルツェ支持の諸団体の連携機関だが、そこに参加した諸労働者教育協会の会員総数は1万7千人を超えていた<sup>(423)</sup>。全ドイツ労働者協会の創立2ヶ月後の会員数は9百人にも届かない<sup>(424)</sup>。これがラサール・バッシングの結果だった。

だが、バッシングの初期はかなり様相が異なる。『フォルクス・ツァイトウング』の4月15日までの報道では、ラサール反対を組織決定したのはケムニッツとニュルンベルクの2つの労働者教育協会だけ。これに対してラサール支持を表明していたのはライプツィヒ、ハンブルク、デュッセルドルフ、ケルンの労働者集会、それにゾーリングゲンの労働者教育協会の5つだった。この状況が、4月17日の同紙に「ラサール・シュルツェ問題<sup>(425)</sup>」という言葉が載った頃か

ら変わってくる。ドイツ各地からのラサール反対、シュルツェ支持の表明が連日のように掲載された。ラサール支持の先行に進歩党陣営が危機感を募らせ、影響下の諸団体に「敵意」の表明を迫ったのだろう。モラル・パニックの本格化である。

4月19日のレーデルハイム大会でもラサールの綱領の扱いが焦眉の案件だった。大会で『公開返書』の批判的な報告を行なったダルムシュタット労働者教育協会議長で自然科学者ルートヴィヒ・ビュヒナーも述べている。ほとんどの労働者協会がその文書に「取り組んだか、取り組んでいるところ」であり、「我々も黙ってやり過ぎすわけにはいかない<sup>(426)</sup>」。ただ、彼の報告から「敵意」は感じられない。ラサールが少しまえから彼に働きかけていたからだろう<sup>(427)</sup>。

これに対してゾンネマンがこの大会に提出した動議は「敵意」に満ちていた。それは、労働者協同組合への国家補助というラサールの提案反対、ライブツィヒ委員会からの権限剥奪、ドイツの諸労働者協会の連合大会開催の3項目を一括して決議するというものだった。だが、動議は票決に至らなかった。フランクフルトとマインツの労働者教育協会の会員が、ラサール案の未検討を理由に抵抗したからである。結局5月17日のフランクフルト大会にラサールだけでなく、シュルツェも招いて態度決定することになった<sup>(428)</sup>。

しかし、そのことによって、またシュルツェの辞退によってもラサールに不利状況が変わったわけではない。フランクフルトとマインツ以外のマインガウ諸都市の労働者教育協会はすべてラサール反対だったからだ。ラサール自身はというと、以前にもまして挑戦的になっていた。4月26日、ダマーあてに彼は、マインガウ労働者大会が「全会一致で私に対する反対を決議しても、是が非でも勝利をもぎ取ってきたい気持ちだ」と書いた。「生涯のなかで私はしばしばそういったことをやってきたし、今度もうまくいくと思う<sup>(429)</sup>」。

もともと、ラサールにしても独りで「勝利をもぎ取って」くることはできなかっただろう。幸いにもフランクフルトから協力者が現れた。フランクフルト労働者教育協会の会員で出版業者のラインホルト・バイストが4月20日付で、ゾンネマンの動議の票決を阻止したのは自分たちであり、マインガウ労働者大

会の状況や関係者たちのことを知らせたいので、5月17日以前に来てほしい、と連絡してきたのである<sup>(430)</sup>。フランクフルトでの出来事を述べるまえに、ラサール陣営のこの間の活動を3つ述べておく。

1つ目は、4月16日にラサールがライプツィヒの労働者集会で行なった講演。これは4月末に小冊子『労働者問題のために』として刊行された。内容は、かなりの部分が賃金鉄則論の権威づけと批判者たちへの反駁に割かれ、これに彼の生産協同組合プランの有効性の主張、また普通選挙権と民主主義の立場の擁護、反動の手先という中傷への反論、憲法紛争における進歩党の態度への批判が付け加えられていた<sup>(431)</sup>。

2つ目は、ラサールによる著名な学者・知識人の獲得工作。これはあまり成果があがらず、4月下旬刊行のロートベルトゥスの小冊子『公開書簡』がほとんど唯一のものであった。他には、短い手紙のなかで労働収益論への支持を表明したライプツィヒ大学の歴史学教授ヴトケくらいで<sup>(432)</sup>、プーハーは運動から離れ、ツィーグラも距離を置いた。ロートベルトゥスにしても、賃金鉄則論に賛成したものの、生産協同組合には批判的で、普通選挙権にも懐疑的だった<sup>(433)</sup>。それでもラサール陣営はこの小冊子を自陣営の文書として扱っている<sup>(434)</sup>。

3つ目は、ライプツィヒの「ドイツ労働者協会」設立委員会の活動。ファールタイヒとダマーは4月23日に設立委員会の名前で協会規約の案文を発表した。これはツィーグラの草案にラサールが手を加えたものが元になっているといわれる<sup>(435)</sup>。この案文については2点指摘すべきことがある。第1に、条文中に創立当初のみ5年任期の会長としてファールタイヒの名前が記されていたことだ<sup>(436)</sup>。場合によっては、ラサールぬきでも事が進められようとしていたのである。第2に、規約案を諸都市の「労働者集会における検討に委ねる」としたうえで、ライプツィヒでの創立大会の期日を「数週間後」とぼかしていることだ<sup>(437)</sup>。じつはファールタイヒらは当初、創立大会を5月13日に予定していた<sup>(438)</sup>。そこにラサールの5月17日のフランクフルト招請が飛び込んできたのだが、彼は案文発表の頃はまだフランクフルトに行けるかどうか不確定だったのである<sup>(439)</sup>。

5月2日、ライプツィヒの労働者集会で規約案が審議され、ラサールの会長選出の期待を込めて会長の個人名が条文から外された<sup>(440)</sup>。フェールタイヒらはあらためて創立大会への代表派遣を各地に要請した。期日は5月23日<sup>(441)</sup>。ラサールが大会を、出席の目途がついた17日のマインガウ労働者大会以後に延期させたのである。彼は是が非でも勝利しなければならなかった。

## **b フランクフルトにおけるラサールの「勝利」の内実**

フランクフルトのラサール支持者たちは4月19日以後も、労働者教育協会のなかでラサール反対の組織決定に抵抗していたが、それが精一杯だった。支持者には協会議長のテオドーア・ミュラーや、のちにラサールから後継会長に指名される著述家ベルンハルト・ベッカーも加わったものの、協会では少数派だったのである<sup>(442)</sup>。彼らは4月末にすでに、「あわよくば5月17日の労働者大会で勝利する」ために、街頭で労働者たちに自陣営の小冊子類や規約案ビラを配布して支持者を増やそうとしていたという<sup>(443)</sup>。

しかし、少なくともラサールが5月14日にフランクフルトにのり込んできてからは、彼の陣営は、17日の労働者大会での勝利はめざさず、むしろ敗北を回避しながら大会を利用して、19日の労働者集会で勝利するという策略を立てたような気配が感じられる。——気配が感じられる、などと曖昧な言い方をしたのは、それがここでの仮説、策略仮説だからである。さしあたりこの仮説の下に彼の「勝利」に至る経過を描き出してみる。そこに筋が通っていれば、策略仮説が証明されたことになるだろう。

ラサールは5月14日にフランクフルトに着くとすぐに労働者教育協会に向向いた<sup>(444)</sup>。策略を練ったのだろう。ビュヒナーにも会った。ハンブルク発行のラサール陣営の週刊紙『ノルトシュテルン』によれば、ビュヒナーは、17日の「異端審問」ではラサールに関して票決させないという仲介案を示したが、ラサールは同意しなかったという<sup>(445)</sup>。策略は練りあがっていたのかもしれない。

まずは5月17日のマインガウ労働者大会。小論ではこれをゾンネマン編集・発行の新聞『ノイエ・フランクフルター・ツァイトウング』の記事で見えていく。

同紙の記事は、ラサールに対する「敵意」を帯びているものの、大会の経過を最も刻明に伝えているからだ。記事によれば、17日は日曜日で、大会は午後3時に始まった。議長はビュヒナー。会場は17都市の労働者教育協会の会員千百人ほどで埋まっていた<sup>(446)</sup>。議事に入るまえに、ラサール支持派のミュラーが労働者大会の性格に異議を唱えた。「これが労働者集会だろうか？委員会〔マインガウ労働者中央委員会〕は、諸労働者教育協会の会員のみを招集したのなら、これは労働者大会ではなくて、たんなる諸労働者教育協会の集会だと宣言しなければならない<sup>(447)</sup>」と。じつはこの発言、説明は後回しにするが、ラサール陣営の策略の伏線だった。

だが、大会議長はさらなる発言要求を斥けて、議事日程に入った。ゾンネマン提出の動議の検討が主要議題だった。まずゾンネマンが演説した。彼はラサールとその支持者たちによる、進歩党と労働者たちの連携に対する分裂策動を強く非難し、「マインガウの諸協会がライプツィヒのドイツ労働者協会に加入するか否か」のみを大会の票決に委ねるという動議を提示した<sup>(448)</sup>。

ゾンネマンの演説のあと、ラサールに発言が許可された。彼は5月17日と19日の講演を合わせて『労働者読本』として出版している。ほぼライプツィヒ講演を3倍に伸ばしたような内容である。17日の講演で彼は賃金鉄則論の正しさを誇示しながら批判者を罵倒し、人口統計に関する自説を擁護して、さらに1億ターラーの国家信用による40万人の労働者生産協同組合プランを説明した<sup>(449)</sup>。だが、ここで見るべきは講演の内容よりも、その戦略的側面である。

講演は4時に始まった。議長と話がついていたのか、ラサールは最初に「長時間話す<sup>(450)</sup>」と宣言した。これが17日の彼の策略だった。大会の時間を自分の演説で独占して、動議の票決にもち込ませないという戦術である。票決にもち込まれれば、敗北は確実だったからだ。彼は他の者たちの発言を要求する会場の声を無視し、野次を浴びながら演説を続けた。6時を過ぎると周辺諸都市の参加者が次々と会場を去っていった。8時頃にはビュヒナーも帰って、マインガウ労働者中央委員会議長ラハマンが大会議長を務めた。ビュヒナーは策略の片棒を担いだかもしれない。ついに8時45分頃、数十人が「やめろ、やめろ」

と大声で叫ぶと、ラサールは演説の中断を宣言した。生産協同組合プランの説明の途中だった。票決の時間はもはやない<sup>(451)</sup>。17日の策略は成功した。

間髪を入れず、つぎの策略が繰り出された。ここは『労働者読本』の記述で見しておく。演説の中断で騒然とするなか、大会議長が閉会を宣言する直前に、ラサール支持者ハイマンが、「彼の演説の続きと結び」は火曜日の「全労働者集会」で行なわれる旨を発表し、「全員がそこに招かれている」と告げた<sup>(452)</sup>。19日の労働者集会の開催がここで初めて公表された。策略本体の告知である。

5月19日の「全労働者集会」は、17日とは別の、フランクフルト労働者教育協会の会場ホールで、夜8時から開催された。ホールは約400席で、さまざまな階層の者たちが混みあうほど集まったという<sup>(453)</sup>。ハイマンが議長となり、すぐにラサールが講演を開始した。彼は協同組合プランの続きを語り、ついで民主主義の党派の立場から憲法紛争における進歩党の態度を批判し、自分が反動に奉仕しているという進歩党陣営からの非難に反論した。「私の協会に加入する50万のドイツ労働者を諸君が私に与えてくれるならば——そうなれば、わが反動はもはや存在しない」と言い放ってもいる<sup>(454)</sup>。

ラサールは1時間半の演説を終えて、議長に預けておいたという動議の票決を集会に求めた<sup>(455)</sup>。『労働者読本』には動議の原文がない。別の史料から補っておく。「フランクフルト全労働者集会は、1) ラサールの綱領にもとづいてなされたライブツィヒ労働者の決議を支持し、全ドイツ労働者協会の実現と普及のために全力で活動すること、2) したがってまた、5月23日にライブツィヒで開催される協会の創立大会に代表を派遣することを決議する<sup>(456)</sup>。」賛成・反対の両意見が出され、40人ほどが「シュルツェ＝デーリチ万歳」を叫んで会場を去った。票決が行われ、400余票対1票で動議が承認された<sup>(457)</sup>。ラサールは勝利したのである。

一見するところ、この労働者集会の経過に策略らしきものは見あたらない。だが、それはラサールが『労働者読本』からその痕跡を消し去った結果なのだ。ゾンネマンの新聞にもとづいて、ラサール陣営が5月19日の労働者集会のために実行した策略と詐術を2点に絞って示してみよう。

第1は、ラサール陣営が19日開催の労働者集会で「ドイツ労働者協会」関連の動議を票決することを、事前には外部に隠していたことだ。妨害を恐れたのだろう。17日夜にハイマンが口にした19日の集会への誘い文句は、ラサールの演説の「続きと結び」だけである。ハイマンの名前でも出された、19日開催の入場無料の「全労働者集会」へ勧誘する新聞広告や数多くの街角のポスターも、書かれていたのはラサールの講演のことだけだったという<sup>(458)</sup>。

19日当日も、ラサールが動議の票決を求めるまで、集会参加者の大半には動議とその票決のことは知らされなかった。単独では十分な人集めができないラサール陣営は、17日に中断された彼の講演を、19日の集会の宣伝と勧誘に利用したようだ。そのため、いきなり動議の票決がもちだされると、聴衆のなかから大きな反発がおこり紛糾した。ゾンネマンの新聞はシュトルクという人物の抗議の言葉を伝える。

我々が招かれたのは労働者大会の続きではなくて、ラサール氏の講演を聴くためだ。だから私は、今日ここで票決できるとは理解していない。……票決をするというのなら、諸君はそれを街角のポスターに書かしておかねばならなかった。我々は聴きにきたのであって、票決を行なうために来たのではない。(熱烈な歓声。野次。騒ぎ)<sup>(459)</sup>」

紛糾のなかシュトルクはさらに、「私と同意見の者は全員ホールを出ていくよう勧める」と発言。これに呼応した約100名が「シュルツェ＝デーリチ万歳」を唱えてホールを去った<sup>(460)</sup>。『労働者読本』は突然の票決に対する聴衆の反発と紛糾についてほとんど語らない。

第2に、『労働者読本』にいう、ラサールの動議の400余票対1票での採択には数字の詐術がある。ゾンネマンの新聞は、ラサールの動議1)の票決で賛成に挙手したのは70余名で、「好奇心から残っていたラサールの敵たちは全員、票決を控えた」結果、反対への挙手は1名にとどまったことを伝える<sup>(461)</sup>。

70余票対1票と400余票対1票——どちらが本当なのか。ゾンネマンの新



聞によると、19日の労働者集会からライプツィヒの創立大会に代表を派遣するという動議2)が、動議1)とほぼ同数の約70票の賛成、反対0票で承認されたあと、派遣代表の選出にあたってラサールは、ホール内の人数を議長に確認するよう求め、さらに集会参加者に向かって、「諸君の代表は、私の見積りでは約500人の代表として参加する。これを確定するために私は見積もらせようとしたのだ」と発言したという。記事はさらに、「400人だぞ」と彼の見積りを訂正する声も伝える<sup>(462)</sup>。400人というのは、当初の出席者数約500人から、会場を去った約100人を差し引いた人数、すなわちその時点での出席者の実数である。

つまり、ラサールは70余人というじっさいの賛成者数を伏せて、票決時の出席者数400人を賛成者数に仕立てあげたのだ。そのなかの300票以上が事実上反対票だったにもかかわらずである。では、なぜそんな詐術を使ったのか。自分への支持が70余票では、勝利の正当性を主張するのに貧弱すぎたのだろう。付け加えれば、この詐術は1ヶ月以上経って出版された『労働者読本』で初めて公表されたものではない。5月20日付の石版刷のビラにも、ライプツィヒあての電報にもその数字が記されていたという<sup>(463)</sup>。

最後に、5月19日の労働者集会の性格に関する従来の研究や歴史叙述の誤解ないし無理解について一言。この集会は17日のマインガウ労働者大会の続き、あるいはフランクフルト労働者教育協会の集会と見られることが多いが<sup>(464)</sup>、どちらも間違いである。正解はラサールの動議の原文のなかにある。すなわち「フランクフルト全労働者集会」。だが、それはたんなる労働者集会と、あるいは労働者教育協会の集会とどこがどう違うのか。

実態はかなり姑息なやり方で開催されたのだが、フランクフルトのラサール陣営にとって「全労働者集会」とは、少なくとも建前の上ではすべての労働者の意思を代表する集会、参加者が労働者教育協会などの会員に限定されない、開かれた集会のことだった。なぜなら、各都市でのそうした労働者集会こそ、「ドイツ労働者協会」設立委員会が旧ライプツィヒ中央委員会の運動の精神<sup>(465)</sup>を受け継いで、諸都市の労働者たちに創立大会への派遣代表の選出を要請した

集会だったからだ。そしてこのことから、5月17日の労働者大会の性格を否認した、大会冒頭のミュラーの発言が策略の伏線だったこともわかる。それは事実上、自分たちは独自にフランクフルトに関する「全労働者集会」を開催するという、ラサール陣営からの事前通告だったのである。

以上、フランクフルトでのラサールの勝利の内実が、策略や隠蔽、詐術による多分に姑息な勝利、正当性に疑問の残る「勝利」だったことを示した。だが、ともかくも彼は創立大会直前に自分自身の勝利を得たのである。

## 第5節 ベルリン征服の失敗とラサールの挫折表明

話はかなり飛ぶけれども、ラサールは1863年10月末から翌年1月初めにかけて、プロイセンの首都ベルリンで大量の労働者獲得を試みて失敗する。その結果彼は、さきに示唆したように、前年3月の『公開返書』刊行で開始した、大規模な労働者党の創出の挑戦が挫折したことをみずから表明する。もっとも、挫折は公然と語られる性質のものではないので、表明されたのは挫折の示唆、その事実上の告白ということだが、いずれにせよ、ここからのテーマは、1863年5月のフランクフルトにおける「勝利」から1864年1月の挫折表明に至るまでのプロセスの考察である。

考察にあたってまず指摘しておきたいのは、ラサールの内部世界では、政治的挑戦の当初から挫折が意識にのぼっていたことだ。そして挫折のさいには、『ヘラクレイトスの哲学』や『既得権の体系』などで名声を得た学問的活動への退却が考えられていた。挑戦への激しい意欲を表明した1863年3月9日付のレーヴィあてのあの手紙のなかで彼は書いている。

しかし、労働者階級全体がまだ明確さまでは成熟していないかもしれない。またそうであれば私はたしかに死者となり、進歩党は私が失敗したとって歓喜するかもしれない。しかし、そのことで私は気分を害したりはしない。そうになったら私は純粋な学問のなかに退くまでのことだ<sup>(466)</sup>。

もちろん、このときは挑戦への意欲が挫折の意識を抑えつけた。それに、敗北の場合の原因を最初から労働者階級の未成熟に想定しているのは、いかにも自信家ラサールらしいが、今はそれは問わない。注目すべきは、挫折のさいの学問への退却という、彼の内部世界における挫折の構図が、5月19日のフランクフルト講演という外部世界向けの間でもほのめかされていたことである。彼はこういつている。

諸君だけでなく、じっさいドイツの労働者階級がこぞって私への反対を決定するならば、そのときは、私は学問のまえて正しさが証明され、きっといつか歴史のまえて正しさが証明されて、安心してふたたび学問のなかに退き、諸君の未成熟を悲しげに小さく笑いながら、たとえばナポリ湾のほとりかどこかで手足を伸ばして、身体の上に南の穏やかな風を吹き渡らせることだろう<sup>(467)</sup>。

この一節は反語的に自分への支持を訴えるラサールの弁論術の一部なのだが、そのことも今は問題にしない<sup>(468)</sup>。重要なのは、これが5月19日の時点で彼が挫折の瀬戸際に立っていたことの実事上の告白でもあったことだ。フランクフルトでラサールと行動を共にしたベッカーはじっさい、のちに全ドイツ労働者協会の文書にもとづいて執筆した『フェルディナント・ラサールの労働者アジテーションの歴史』(1874年)のなかで、「ラサールは、きわめて多くの労働者が彼に反対した以上、ここ〔フランクフルト〕で敗れていたとしたら、自分の企てを放棄していただろう<sup>(469)</sup>」と記している。

もちろん、5月19日にラサールは瀬戸際に踏みとどまった。そして5月23日には全ドイツ労働者協会の会長に就任する。それがなぜ、どのような事情で7か月後に挫折を表明することになるのか。まずは進歩党陣営のモラル・パニックのその後にふれたあと、この問題の考察に移ろう。

## (i) 全ドイツ労働者協会の創設とラサールの会長就任

### a ドイツ諸労働者協会連合大会とラサール・バッシングの終息

フランクフルトにおける5月17日と19日の出来事は、以前にもまして進歩党陣営をラサールへの憤激に駆り立てた。進歩党陣営は圧倒的に優勢だったにもかかわらず、ラサールと彼の支持者たちを「異端審問」から取り逃がしただけでなく、結局のところ出し抜かれた格好になったからだ。

5月20日の『フォルクス・ツァイトゥング』は、フランクフルトのラサール支持者たちを、当時陰謀団体として知られた「硫黄団」、ラサールをその首領と呼んで非難した<sup>(470)</sup>。さらに5月末にはマインガウ労働者中央委員会議長ラハマンが述べた、19日の労働者集会は「5月17日のマインガウ労働者大会とはまったく関係がなく、現在それに添えられている「全労働者集会」を自称することはできない<sup>(471)</sup>」という怒りの言葉も伝えている。

ゾンネマンの『ノイエ・フランクフルター・ツァイトゥング』は5月22日の論説で、一昨日以来「ラサールの出勤に関する批判として聞かれるのは、抑えられない爆笑ばかりだ」と書き、「当地の誰もが知るように、あの陰謀劇全体は彼自身の滑稽さにおいて破滅した」と、ラサール陣営の行動をあくまで嘲笑しようとした<sup>(472)</sup>。『アルバイター・ツァイトゥング』は5月31日の記事で、ラサールは「日曜日[17日]のマインガウのすべての協会のまえでの確実な敗北をいかに糊塗するか」の計画を練っていた。もともと5月17日の労働者大会は余計なものだったのだ<sup>(473)</sup>と、むしろ悔しさを滲ませる。

これに比べれば、少し先回りになるが、5月23日の「ドイツ労働者協会」の創立大会に関する諸新聞の反応は淡泊だった。織り込み済みの出来事だったからだろう。『フォルクス・ツァイトゥング』は「ラサールの労働者党の代議員集会」での規約採択とラサールの5年任期の会長選出を短く報じたにとどまる<sup>(474)</sup>。『アルバイター・ツァイトゥング』は、他の新聞の冷静な記事をコメントなしで転載しただけだった<sup>(475)</sup>。ゾンネマンの新聞は独自の刻明な記事を載せたが、そこにあるのは「敵意」というよりシニカルな見方である<sup>(476)</sup>。

付け加えると、『フォルクス・ツァイトゥング』は5月末－6月初めに、数都

市の団体のラサール反対表明を報じている<sup>(477)</sup>。これは、さきにふれたドイツ諸労働者協会連合大会への代表派遣の決定に伴うもので、じつをいうと、この6月7-8日の連合大会開催を区切りとして、自由主義派諸新聞にラサール反対の記事がほとんど載らなくなる。これは、2ヶ月余にわたるラサール・パッシングが、モラル・パニック現象の重要指標である「一時性」、すなわち、「突如発生して急速に収まってしまう」という特徴を有していたことの証左でもある。

だが、いったいなぜ載らなくなったのか。連合大会の提唱者ゾンネマン自身、5月17日のマインガウ労働者大会ですでに、「ライブツィヒから呼びおこされた分裂が、他の諸協会が互いにより密接に近づきあうきっかけを作った<sup>(478)</sup>」と述べていたが、進歩党陣営はおそらく、ラサールという「民衆の悪魔」の排撃を梃子にして、連合大会においてドイツ全土の50近い都市の労働者(教育)協会の結束を固め、自分たちの政治路線や自由主義的な経済的・道徳的規範を広範な労働者層に再確認させることができたと安心したのだろう。

## b 全ドイツ労働者協会の創設とラサールの会長就任

5月19日のフランクフルトにおける「勝利」の翌日、ラサールはマイنتスの労働者集会において800対2で勝利し<sup>(479)</sup>、そこから直接ライブツィヒに向かった。5月23日の「ドイツ労働者協会」創立大会についても、ゾンネマンの新聞の記事で見よう。大会には11都市の労働者代表9名が参加し、来賓としてラサール、ヴトケ、ベッカー、『ノルトシュテルン』編集人のブルーンらが招かれていた。大会は聴衆、労働者代表、来賓、全部含めても150人以上にはならなかったようだ<sup>(480)</sup>。ライブツィヒでは、2ヶ月まえにラサールの綱領を1350対2で支持した熱気はなくなっていた。規約案を検討した5月2日の労働者集会にも250人ほどしか集まらなかったという<sup>(481)</sup>。

それはともかく、大会は議長にフェールタイヒが選出され、議事が始まった。議題は規約の確定と人事の決定の2つ。規約条文の詳しい紹介は省く<sup>(482)</sup>。大部分の条項は代表9名の全員一致の同意を得たが、2つの規定に反対意見が出た。最初の会長職のみ任期5年の規定と、年1回の総会の開催地の決定権は

会長が有するという規定である。票決が行なわれ、両規定とも賛成6票、反対3票で承認された<sup>(483)</sup>。会長は独裁的な権限をもつことになった。また会長1名と幹部委員24名で構成される幹部会は、暫定的に幹部委員を16名とし、随時補充する条項が設けられた<sup>(484)</sup>。

人事の主要議題は会長の選出だった。労働者代表9名中8名がラサールを支持して会長に選出した(残り1名は白票)。ただ、彼がこれを引き受けるまでにかなりの時間を要した。彼は2つの条件を提示した。1つは、自分の選出が、代表を出した全都市の全会員によって批准されること、もう1つ、自分に代る1名を副会長に任命する権限が与えられることである。前者の条件はすぐに認められた<sup>(485)</sup>。自分の権威を協会全体に浸透させたかったのだろう。

これに対して後者の条件は、労働者代表たちを納得させるのにかなり手間取ったようだ。ラサールはできるだけ都合のいい条件を確保したかったのだろうが、自分の学問的活動を犠牲にして見合う会員数として10万人という数字を示し、さらに健康上の理由もあげた。その結果ようやく承認されて、彼は会長職を引き受けた<sup>(486)</sup>。だが、それは彼が協会の勢力を1万人ほどと思っていたためかもしれない。地元紙の記事によれば、彼は大会後の祝宴スピーチで、「我々は今日すでに強力な党になっており、この時点で8千から1万人のドイツ労働者が、会員として自分の名前を書き入れる名簿が提示されるのを待ちわびている<sup>(487)</sup>」と語っている。反面、彼は労働者の未成熟を心配していた。数日後ベッカーに、「事が失敗したら、我々はひどく恥をかくことになる」と打ち明けたという<sup>(488)</sup>。彼の会長就任は挫折の危険性を孕んだものだったのである。

創立大会では幹部委員16名が選出され、そのなかから会計にレーヴィ、有給の書記にフェールタイヒが任命された。また書記や会計の業務、さらに各都市の責任者である全権委員の任務を定めた「運営管理規程暫定要綱<sup>(489)</sup>」が承認された。8時過ぎ、大会はラサール万歳を唱えて閉会となった。

付け加えれば、当初の規約上の名称である「ドイツ労働者協会」を「全ドイツ労働者協会」という呼称に定着させたのもラサールだった。彼は、敵が「全ドイツ労働者協会」を設立したら、自分たちの協会がその地方団体のように見え

るのを危惧したという<sup>(490)</sup>。以下、小論でもこの通称を用いる。

## (ii)「ベルリン征服」の失敗とラサールの挫折

### a スイス・ベルギー保養旅行からライン演説へ——挑戦意欲の復活

全ドイツ労働者協会創立のあと、ラサールは6月初め、10月に予定された『特殊な連関』裁判第2審のための弁論書として『間接税と労働諸階級の状態』を出版、6月下旬には『労働者読本』を刊行した。また6月17日付で諸都市の全権委員あてに「訓令」を発し、8月1日時点の会員名簿を書記ファールタイヒあてに、徴集会費を会計レーヴィあてに送付するよう、また各都市で会員たちの公開の集会を月に1度招集するよう指示している<sup>(491)</sup>。協会の実勢を把握し、財政基盤を確立するとともに、勢力拡大を図ろうとしたのである。

ところが、ラサール自身は6月27日付の「公告」で、ダマーを副会長に任命して、翌日スイス湯治旅行に出発することを発表した。それは「民主主義的・社会的アジテーション万歳。秋にまた会おう<sup>(492)</sup>」という言葉で結ばれていた。ベッカーによれば、ラサールは労働者を見殺しにした、労働者のお金をもち逃げた、などと誹謗する者がいたというが<sup>(493)</sup>、自由主義派新聞のじっさいの反応は薄い。ゾンネマンの『ノイエ・フランクフルター・ツァイトウング』がこの「公告」に添えて、「おそらくはユーモラスな効果をねらった命令<sup>(494)</sup>」と軽く揶揄しただけで、ベルリンの『フォルクス・ツァイトウング』は「公告」は載せたが、コメントなし<sup>(495)</sup>。『アルバイター・ツァイトウング』はそもそも載せていない。もはや相手にしないという素振りである。

それはともかく、ラサールは6月末から約3ヶ月の間、前半はスイスの、後半はベルギーの保養地で過ごした。とはいえ、彼は協会の事柄から完全に離れていたわけではない。ベッカーの著書には、抄録だが、この時期にラサールがファールタイヒと交わした私信が何通か収められている。ここでは、8月1日時点での会員数と会費の徴集状況を会長に報告した書記の手紙と、その報告を受けて書かれた会長の手紙を見てみよう。

まず8月27日付のファールタイヒの手紙。ベッカーの抄録には900名弱と

いう会員数の報告部分が欠けているが、協会書記は、会計レーヴィから報告された会費徴集の芳しくない状況を示して、「協会のために数百ターラーも徴集できないなら、我々はこの協会を解散せざるをえないか、別の措置をとらざるをえません<sup>(496)</sup>」と、協会の解散まで口にする。協会専従の書記となった彼にとって、協会財政の問題は生活問題でもあった。また「別の措置」とは、書記によれば、「社交的な集まりの場と精神的な娯楽」を提供するようなやり方、個々の都市での「教育協会」のような組織のことだった<sup>(497)</sup>。

つぎに8月29日付のラサールの手紙。彼はまず、「わが協会が全部で会員約千人だとは！」と驚きを隠さず、「大衆のこの無関心は絶望的だ」と嘆じる<sup>(498)</sup>。だが、会長は協会の解散を口にした書記にはつぎのように書き送った。

協会を解散する、と君はいうのか？とんでもないことだ！そうするには過ぎた時間はあまりにも短い。まだひと冬も越していない。そんなことをしたら、わが国民と党にとって恥辱はあまりにも大きい！顔向けできない！加えて現在の政治的状況では、それは途方もない誤りだろう。事態が現在のようである間は、私は剣を捨てない。……私は来春か夏以前にはけっして協会を解散しない<sup>(499)</sup>。

ラサールにはまだ挑戦の意欲が残っていた。同じ手紙のなかで彼は事態の改善策として、1) ライン地方での彼自身によるアジテーション、2) 共済組合の設立、3) 娯楽の集いや社交の組織をあげ、とくに改善策1) に対しては2-3千人の会員増加を期待したのである<sup>(500)</sup>。じっさい彼は、協会歌の作詞を依頼した革命詩人ヘルヴェークあての8月31日付の手紙のなかで、ライン地方の集会の準備は「じつに素晴らしくて、大衆がどんどん寄り集まる気配です<sup>(501)</sup>」と書いている。さらに9月上旬には、ラサールへの信頼と感謝を込めた、ライン地方の労働者たち1412人の署名が彼を喜ばせた<sup>(502)</sup>。

しかし、ラサールのこの期待のなかにも挫折が孕まれていたことを見逃してはならない。彼は「来春か夏」以後の解散の可能性を示唆したともいえるから



だ。ちなみに、さきの改善策の 2) と 3) を会長はあとで斥けている<sup>(503)</sup>。一見些細な意見の相違だが、それは、翌年 1 月に彼がベルリンで事実上の挫折表明をしたさいに、ファールタイヒの書記辞任という形で突如表面化する両者の対立の一因でもあったようだ。しかし、ベルリンでの出来事を語るまえに、9 月下旬に展開された、プロイセン西部ライン川流域諸都市でのラサールの活動を見ておかなければならない。一度は敗北したベルリンでの活動に再挑戦する意欲をかき立てたのが、ラインでの一応の「成功」だったからである。

ラサールのライン地方での演説集会は、9 月 20 日にバルメン、27 日にゾーリングゲン、28 日にデュッセルドルフで開催された。デュッセルドルフについては不明だが、バルメンでは 2 千人以上を集め、ゾーリングゲンでは巨大な会場が用意されたようで、会場の外も含めれば 1 万人以上が押しかけたという<sup>(504)</sup>。演説集会は全ドイツ労働者協会会員の公開集会として企画され、会員以外の者も参加できたのである。この地方では 1848 年革命以来、ラサールは革命派、民主主義派として知られていたが、全権委員や会員たちは、彼を労働者状態の根本的な改善策を提起した人物として宣伝していたらしい<sup>(505)</sup>。

だが、そこにはかなりの数の進歩党派の者たちも参加しており、そのためにバルメンとゾーリングゲンでは集会が荒れた。とくにゾーリングゲンでは、ラサールの進歩党批判演説を妨害して放り出された進歩党派の者を、興奮した労働者がナイフで傷つける騒ぎがあった。しばらくしてやってきた警官が騒ぎを理由に集会を解散させると、ラサールは警官に伴われ、群衆に囲まれながら会場から電報局へ行き、進歩党派の市長が不当に集会を解散させたとして、「厳格かつ早急な法律的補償」を要請するよう、首相ビスマルクに電報を打った<sup>(506)</sup>。

このいわゆるゾーリングゲン電報事件や、バルメン演説をもとにした小冊子『祝宴、新聞およびフランクフルト代議士大会』におけるビスマルクへの言及によって、ライン地方での活動は「ラサールの戦術転換<sup>(507)</sup>」を示すものとされている。だが、ここでの問題は労働者党を創り出す彼の挑戦と挫折のプロセスであって、この「戦術転換」の問題には立ち入らない。ただし、ライン演説についてはつぎの 2 点を述べておこう。1 つは、プロイセン下院の選挙が 10 月末に予定さ

れていたが、彼は、憲法紛争において政府と進歩党の対立が続くことが我々の関心事だとして、進歩党への投票を労働者に促していたことだ<sup>(508)</sup>。進歩党への期待は捨てられてはいなかったのである。もう1つは、演説の小冊子が10月半ばにデュッセルドルフで出版されると、憎悪・侮蔑を煽った嫌疑で警察に押収され、彼自身も起訴されたことだ<sup>(509)</sup>。これはベルリンでの彼の活動を脅かすことになる。

話を元にもどそう。ラサールは21日にケルンで演説する予定だったが、喉を痛めて欠席。28日のデュッセルドルフ集会では演説途中で声が出なくなった。そのあとに予定していたハンブルク行きも中止された。では、ライン演説の成果はどうだったか。ベッカーは演説前と後のライン諸都市の会員数を比較して約500名の増加と見積もり、実態はラサールが期待した人数の4分の1程度だったと述べている<sup>(510)</sup>。

しかしながら、ライン演説集会でのさまざまな出来事、なかでもゾーリングゲンでの体験はラサールの気分を実態以上に高揚させたようだ。彼はさきの小冊子の巻末に、ゾーリングゲンの出来事を伝えた地元紙のつぎの記事を引用している。「1848年ですらラインラントは昨日ゾーリングゲンで催された労働者集会ほど大規模な人民集会を見たことがなかった」。会場から電報局までの彼の徒歩行は、「ひっきりなしにラサールに対する割れんばかりの万歳の声であふれ、群衆全体に導かれて、あたかも凱旋行進のようだった。民衆は彼が逮捕されたと思いついていたので、民衆の同情はそれだけいっそうエネルギッシュなものになった。全ゾーリングゲンが街頭に出ている<sup>(511)</sup>。」

ベルリンに帰ったラサールは10月8日にヘルヴェークあてに書いている。

ラインラントでは熱狂の点でも人数の多さの点でも、こんなことは私自身1848年以来経験したことはありません。小冊子のなかでごくわずかの部分ですが、それについて述べておきました。そうでもしないと、ベルリンの者たちは信じてくれないでしょうから。私は自慢しているのです！これからベルリンの包囲に着手します<sup>(512)</sup>。

## b 「ベルリン征服」の失敗とラサールの挫折表明

1863年10月7日、ラサールはおそらくファールタイヒとともにベルリンにもどった。書記もベルリンに移り住んだのである。このときラサールは2つの課題に直面していた。1つは彼の個人的な課題で、『特殊な連関』裁判の第2審を闘うことである。これは10月12日に弁論が行なわれ、19日に100ターラーの罰金刑が言い渡されて終結した<sup>(513)</sup>。彼はともかく拘禁刑をまぬがれ、ベルリンでの活動の自由を得た。

もう1つは全ドイツ労働者協会の会長としての課題で、ここには3つの任務があった。第1は協会の地盤固め。10月7日付の「回状」のなかでラサールは、会長職への復帰を告げたあと、全権委員たちに期限厳守での会員名簿と徴集会費の送付を強く求めた<sup>(514)</sup>。彼にとっては協会の存亡に関わる問題だった。

第2にベルリンでの大量の会員獲得。同じ「回状」のなかで彼は、「外に向かつての絶え間のないアジテーション<sup>(515)</sup>」も諸都市の全権委員と幹部委員の任務としてあげている。これはそのベルリン版、会長自身による実践である。4月にはここで戦わずして敗れていただけに、彼の威信をかけた任務だったが、ラサールに対する反感とともにシュルツェに対する崇敬がベルリンの労働者の間に浸透していただけに、大きな困難が予想された。

第3に、政治情勢の判断。この時期は、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題が再燃し、ドイツ諸邦がデンマークとの戦争へ突入していった時期で、情勢の急展開はプロイセン憲法紛争に影響を及ぼし、またこの紛争の激化に期待をかけていたラサールの挑戦の意欲にも影響を及ぼすことになる<sup>(516)</sup>。

ここで考察するのはほぼ第2の任務だけだが、ラサールがこの時期に最も力を注いだのもこの仕事だった。10月末、ダマーからの理論的な講演の依頼に対して彼は、今は学問的な仕事には向かわない、「私は全力を、ベルリンを征服することに集中しなければならない<sup>(517)</sup>」と断わっている。10月19日、ハッツフェルト伯爵夫人にあててこう書いていた。「遅くとも3ヶ月後にはベルリンは私のものだという声明とともに当地にやってきました<sup>(518)</sup>」と。

ラサールは「ベルリン征服」という目標を2つの手段をつうじて達成しよう

とした。1つは、小冊子『ベルリンの労働者へ』の普及によって、もう1つは、協会の会合での連続講演によって。まず小冊子についていうと、彼はそのなかで、『フォルクス・ツァイトゥング』や『ベルリーナー・レフォルム』などの自由主義派新聞がまき散らす、ライン演説や自分の主張に関するさまざまな虚偽を暴き、さらに進歩党とシュルツェ＝デーリチの迷走や欺瞞を示して信用を失墜させながら、自分の真の主張をベルリンの労働者に提示しようとした。とりわけ、自分が反動への奉仕者だという進歩党の見方に対して、むしろ1848年革命以来の民主主義派、革命派であることがわかるように議論を展開している<sup>(519)</sup>。

そして最後にこう述べて、ベルリンの労働者に協会への入会を訴えた。

ドイツの最重要中枢は獲得された。ライプツィヒとザクセンの工場地帯は我々を支持している。ハンブルクとフランクフルト・アム・マインは我々の旗の下に行進している。

プロイセン領ラインラントはすでに駆け足で先頭を走っている！

ベルリンをもって運動は抗しがたいものになるのだ！<sup>(520)</sup>

小冊子は10月18日に1万6千部出版された。ラサールはそのうちの1万部をタダで配布して、ベルリンの労働者を大量獲得しようとした。だが、そこにはいくつかの困難が立ちはだかった。第1に警察。7月の時点でベルリンの会員は20名にふえ、全権委員も幹部委員もいたが、会員の活動は警察の監視によって制約を受けていた<sup>(521)</sup>。第2にベルリンの労働者。ベッカーによれば、彼らの大部分は小冊子を受け取るのを拒んだ。受け取った者もたいていは読まず、読んだ者は理解しないか、信じなかった。「毎日発行される諸新聞に対して、またしっかり根づいた偏見に対しては、一小冊子では何の成果もあげられなかった<sup>(522)</sup>。」第3に検察。小冊子に大逆罪の嫌疑をかけた。刊行直後に版元で3千部を押収。会員のところへも家宅捜索が入った<sup>(523)</sup>。

では、講演活動はどうだったか。ラサールは協会の会合の最初の3回を慎

重に会員のみでの非公開会合として開催し、そのあとに公開会合を予定した。ここでも進歩党派の労働者や警察、検察が立ちはだかった。それは少しずつ彼の挑戦の意欲を削いでいった。その様子を『ノルトシュテルン』と『フォルクス・ツァイトゥング』という対立する2紙の記事で見ている。

まず3回の非公開会合から、『ノルトシュテルン』の記事によれば、その第1回は10月26日(月)の夜に開かれた。出席者は70名ほど。ラサールは自分の活動と協会の状況を報告。開会前に35名の新規加入があり、ベルリンの会員数が90名以上になったと伝え、自分の期待以上だと語った。会場から質疑が相次ぎ、会長や書記が逐一对応していたが、発言者たちの進歩党的立場が明らかになるや、会長は彼らに退会を求めた。その結果11名が脱退<sup>(524)</sup>。『フォルクス・ツァイトゥング』はその経過を「愉快」と評し、脱退者は30 - 40名と報じた<sup>(525)</sup>。初回から攪乱の妨害にあったのだ。ちなみに、『アルバイター・ツァイトゥング』は第1回会合の記事にコメントし、コメント自体を「紙の無駄使い」と述べたうえでラサールの破滅を予言した<sup>(526)</sup>。それ以後、会合の記事を載せていない。

第2回は11月2日(月)だった。『ノルトシュテルン』にはこの会合の記事がない。『フォルクス・ツァイトゥング』の記事とそのなかに紹介されたファールタイヒの報告によれば、まず60名の新規加入があり、ついでラサールが演説した。進歩党と新聞への批判と経済学的知識の誇示だったが、演説の最後に彼は、今回から討論は行なわないこと、発言させないこと、動議を受けつけないことを指示したという。そのあとヘルヴェークの「盟約歌」が披露され、さらにJ・B・v・シュヴァイツァーがラサールに捧げた社会小説『ルツィンデ』が朗読されたが、小説のなかの、「シュルツェ派の者たち」が嘲笑される場面が読みあげられたとき、「やめろ」の声がおこり、同時に会場外から一群の者たちが押し入ってきた。騒ぎが収まらず、臨席の警官が集会の解散を命じると、警察万歳の声があがった。さらに、入会金の返還を拒否された新規加入者中の20 - 25名が騒ぎ出した。外の庭園にいた100人ほどの者がシュルツェ万歳を叫び、会場を去るラサールに罵声を浴びせかけた<sup>(527)</sup>。警察と進歩党が連携した妨害

だったようだ。

第3回は11月10日(火)、『ノルトシュテルン』によると、開始前に前回の妨害者2名が放り出され、会合は比較的平穩に推移した。ラサールは演説に先立ち、15日(日)に公開の会合を開催して、協会の歴史と文献についての講演を行なうことを予告。前回の騒動の経過報告と警視総監あての長大な抗議文の朗読が演説内容だった<sup>(528)</sup>。『フォルクス・ツァイトUNG』は彼の演説を「目立ったのは退屈さ」と皮肉ったが、協会の公開集会は入場無料、6回連続で開催されるという情報も伝えている<sup>(529)</sup>。

11月15日の公開会合は『ノルトシュテルン』に記事が出ていない。警察あてのラサールの抗議文によると、会場には1千5百人以上集まったが、大勢のシュルツェ派の労働者が入場券なしで入ってきて騒ぎたてたという。ただし、この会合は、ラサール自身が喉の炎症で欠席して流会になった<sup>(530)</sup>。『フォルクス・ツァイトUNG』はこの会合の記事につきのように書いた。ラサール陣営の集会は、ベルリンに彼らの地盤がないことを悟るまでは繰り返されるのだから、進歩党と自由主義派諸新聞は、「今後これらの集会をあまり気に留めないように<sup>(531)</sup>」と。すでに妨害の効果ありと見たのだろうか。——11月20日、ラサールはレーヴィンにあてて、ベルリンの会員数は2百名ほどになったが、そのなかには「多くの信用できない要素」がいて、「我々が当地でいつ勝利するかはいえない<sup>(532)</sup>」と書いた。以前の期待と意欲は失われつつあった。

11月22日(日)の公開会合には約千人の聴衆が集まり、ラサールも出席したが、この日彼の身に事件がおこった。『ノルトシュテルン』の記事によれば、講演の内容は、彼が反動に仕えているという主張への反駁だった。今回も相当数の進歩党派の労働者が会場に入っていたが、彼の演説が聴衆からの抗議を引きおこしていたとき、突然警官隊が押し入ってきて集会を解散させ、彼を連行したのである。『ベルリンの労働者へ』に関する大逆罪容疑での逮捕だったが、そのさい進歩党派の労働者が、自分たちの最も危険な敵が逮捕された、と歓声をあげたという<sup>(533)</sup>。『フォルクス・ツァイトUNG』も、「出席者のかなりの部分が警察の措置に対する同意を強く表明した<sup>(534)</sup>」ことを報じている。

会長の突然の逮捕という重大事態に、協会書記ファールタイヒは諸都市の全権委員に対し、ただちに各都市で会員集会を招集して、指導者への同情表明、ベルリン労働者の歓声に対する抗議署名などを求めた<sup>(535)</sup>。だが、逮捕から3日後の25日にラサールは3千ターラーの保釈金を払って釈放された。その日のうちに彼は「布告」を出して12月6日(日)に講演を続ける旨を告げた<sup>(536)</sup>。

12月に入ると『フォルクス・ツァイトゥング』はラサール陣営の会合を報じなくなった。以後『ノルトシュテルン』のみに拠る。12月6日の公開会合は約500人が集まり、ラサールは『憲法の本質』についての講演を行なった。今回も10-15名のシュルツェ支持者がいたが、あまり騒ぎを起こさずに去ったという<sup>(537)</sup>。ついで会合は12月13日(日)に開催。『ノルトシュテルン』の記事は、会長が『労働者綱領』に関する講演を行なったこと、集会の経過がまずまずだったことを伝えるだけで<sup>(538)</sup>、参加人数への言及はない。つぎは12月27日(日)。『ノルトシュテルン』の記事にやはり参加人数の記載なし。参加者が少なくなっていたのかもしれない。記事は、ラサールが『労働者綱領』に関する2回目の講演を行なったこと、協会が掲載を依頼した有料の広告を自由主義派新聞が突き返してきたことを報じている<sup>(539)</sup>。

1864年に入ってラサールは1月10日(日)の公開会合で講演を行なった。『ノルトシュテルン』は、彼自身の手になると思われる講演の要約記事を載せている。参加者数への言及はない。講演の内容は1年まえに刊行した『何をなすべきか』の解説と進歩党との同盟の終結宣言である<sup>(540)</sup>。興味を引かれる事柄だが、その問題にはやはり立ち入らない。

注目すべきはむしろ、その記事の末尾に、演説人は「歓呼の拍手喝采と嵐のようなかけ声を聞きながら演壇を去った<sup>(541)</sup>」と記した当のラサールがその翌11日、全幹部委員あてにつぎの内容の「回状」を出したことだ。ファールタイヒは2月1日に協会書記を辞任する。新書記に自分はゾーリングゲン全権委員の刀剣労働者ヴィルムスが最適任だと思う<sup>(542)</sup>、と。ファールタイヒと軋轢があったらしいが、これにもここでは立ち入らない。重要なのはそのあとの一節である。

しかしながら、弱体な金銭収入のために、協会がそもそもあと何ヶ月持ちこたえるかという問題が微妙になり始めており、そのために書記の仕事があと数ヶ月しか続かない場合に、一労働者を急いでこの目的でベルリンへ転勤させるのは疑問に思われることを私は隠しておくことができない<sup>(543)</sup>。

協会解散の仄めかしである。ラサールは労働者党の創出という自分の挑戦の挫折をこんな形で告白したのだ。しかも、私信中の内密の話題としてではなく、組織内部向けではあれ、公然と通知したのである。突然の告知に驚いた幹部委員たちからは問合せの声が殺到した。ベッカーはまだ幹部委員ではなかったが、「あなたは剣を捨てて、我々を見捨てるのか」と抗議したという<sup>(544)</sup>。さすがにラサールもその後は協会の解散に類することを口にしなくなったが、それでもベッカーには5月末に、解散を覆い隠す手だてについて相談している<sup>(545)</sup>。

じっさいには全ドイツ労働者協会は存続した。成長してすらいる。ラサールが死去した1864年8月末の会員数は4千5百人を超えていた<sup>(546)</sup>。だが、彼の挑戦の意欲はやはり1月11日で途切れてしまったようだ。会長としての最後の仕事は、幹部会がフェールタイヒの協会分権化の策謀をやめさせなければ、自分は会長職を降りると全幹部委員に迫った7月27日付の「回状<sup>(547)</sup>」だが、そこに至る7ヶ月間に彼が行なっためぼしい活動をあげてみよう。

まず2月半ばの論難書『バステリア＝シュルツェ・フォン・デーリチ』の刊行。これはすでに、彼の内部世界の言葉にいう学問的活動に属するものだ。つぎに5月下旬の協会創立祭演説。これは全ドイツ労働者協会のアジテーションの成果と自分の独裁的権威について虚勢を張ったものにすぎない。残るのは、ベルリン小冊子に関する4月の大逆罪裁判演説と、ライン演説小冊子に関する6月の裁判演説の2つだが、当然ながらどちらも守りの姿勢のものでしかない。どの活動からも、フランクフルト演説のような挑戦の意欲は感じられない<sup>(548)</sup>。

それにしても、ラサールに自分の挑戦の挫折を悟らせたのは何だったのか。原因はいくつか考えられる。1月11日の「回状」に記されている協会財政の弱さは疑いなくその1つである。記されてはいないが、健康問題も重要な1つ



としてあったようだ。しかし、最大の原因はやはり「ベルリン征服」の失敗だろう。1月10日の講演では続きを行なうことを言明しながら、それを最後にベルリンでの講演活動をやめてしまった。また一時2百名に達したベルリンの会員数は、2月半ばには35名に減っている<sup>(549)</sup>。大半が進歩党派の偽会員だったのだろう。そうだとすれば、彼はフランクフルトでの策略のために、ベルリンで手ひどいしっぺ返しを食らったのである。ベッカーによれば、ラサールは、自分を連行する警察に対してベルリンの労働者たちが歓呼と拍手を送ったことが忘れられなかったという<sup>(550)</sup>。

「ベルリン征服」の失敗はさらに、ドイツ革命の実現というラサールの大きな挑戦との関連でも理解する必要がある。彼のその挑戦は、プロイセン憲法紛争の激化から生じる革命状況への期待の上に——それのみではないが、その期待を重要な前提の1つとして——成立していた。そうした状況をドイツ革命にまで推し進めるための大労働者部隊をプロイセンの首都で創り出すことが、彼のいう「ベルリン征服」だったのである。ところが、その「ベルリン征服」の失敗が明らかになってきた1863年末から1864年初めの時期に、ドイツ諸邦の対デンマーク戦争への動きが憲法紛争を急速に政治舞台から退かせ始めたのだ。彼にとってそれは革命実現の挑戦の重要な前提の消滅であり、「ベルリン征服」の挑戦を無意味にするような事態だった<sup>(551)</sup>。言い添えておけば、彼が普通選挙権欽定のうわさを聞きつけてビスマルクに会見を申し入れ、首相との何度目かの会談でその欽定を促したのも、ほかならぬ1月11日前後のことである<sup>(552)</sup>。

最後に、1864年1月11日以降のラサールの発言のうち、学問への退却という、彼の内部世界におけるあの挫折の構図が見てとれるものを示しておこう。彼は元書記に対する措置を求める「回状」を執筆した翌日の7月28日、スイスの保養地からハッツフェルト伯爵夫人に出した手紙のなかでこう洩らしている。

すべての政治から逃れて、学問や交友や自然のなかに引きこもること以上に切に願っているものはありません。私は政治が厭になってうんざりしている

のです。……（でもどうすれば逃れられるのでしょうか?!）<sup>(553)</sup>

この手紙のすぐあと、ラサールは訪れてきた貴族の若い女性と婚約するのだが、女性の父親の強硬な反対にあう。1ヶ月近く奔走したあげく、8月28日にジュネーヴ近郊で、父親が決めていた女性の許婚者とピストル決闘を行ない、そのときの傷がもとで8月31日、命を落としてしまう。この間、全ドイツ労働者協会の会長としての仕事は放り出したままだった。（完）

## 注

- (421) Bernhard Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.43.
- (422) Erich Eyck, *Der Vereinstag deutscher Arbeitervereine 1863-1868*, Berlin 1905, S.15-16 を参照せよ。
- (423) Bericht über die Verhandlungen des ersten Vereintages der deutschen Arbeitervereine, [S.7], in : Dieter Dowe (Hg.): *Berichte über die Verhandlungen der Vereinstage der deutschen Arbeitervereine*, Berlin/Bonn 1980 を見よ。
- (424) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.43.
- (425) — Arbeitervereine, in VZ, No.89, 17. April. 1863.
- (426) Louis Büchner, *Herr Lassalle und die Arbeiter*, Frankfurt a. M. [1863], S.3.
- (427) Ludwig Büchner, *Meine Bewegung mit Ferdinand Lassalle*, Berlin 1894, S.5 ff を見よ。
- (428) Hans Ebeling, *Der Kampf der Frankfurter Zeitung gegen Ferdinand Lassalle und die Gründung einer selbständigen Arbeiterpartei*, Leipzig 1931, S.41.
- (429) Lassalle an Dammer, 13. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.150, S.420.
- (430) Reinhold Baist an Lassalle, 20. April 1863, in: *NBS*, Bd.5, S.141-142.
- (431) Lassalle, Zur Arbeiterfrage, in : *GRS* Bd.3, S.117-146.
- (432) Heinrich Wuttke an Lassalle, 16. April 1863, in : *GRS* Bd.3, S.147.
- (433) Rodbertus, *Offener Brief an das Comité des Deutschen Arbeitervereins zu Leipzig*,

Leipzig 1863, S. 3-15.

- (434) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.196 を見よ。
- (435) Andréas, *Lassalle.Bibliographie*, S. 96-97 を見よ。
- (436) Entwurf der Statuten für einen „Deutschen Arbeiterverein“ vom 23. April 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.148, S.417.
- (437) *Ebenda*, S.417.
- (438) Dammer an Lassalle, 27. April 1863, in: *NBS*, Bd.5, S.153 を見よ。
- (439) Lassalle an Büchner, 23. April 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.196, S.565.
- (440) Ebeling, „*Der Kampf*“, S.38収録のNeue Frankfurter Zeitung [NFZ] Nr.127, 8. Mai 1863 の記事 „Die Lüge ist eine europäische Großmacht!“ を見よ。
- (441) So eben geht uns eine Einladung ..., in: *AZ*, Nr.19, 10. Mai 1863.
- (442) Ebeling, *Der Kampf*, S.43-47.
- (443) Frankfurt, den 30. April. In dieser Stadt .. , in: *AZ*, Nr.19, 10. Mai 1863.
- (444) Ebeling, *Der Kampf*, S.58 を見よ。
- (445) Lassalle auf dem Arbeitertage des Maingau's in Frankfurt am. Main, in: *Nordstern*, No.123, 23. Mai 1863.
- (446) Versammlung der Arbeitervereine des Maingau's, in: *NFZ*, Nr.138, 19. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.66-68. 5月17日の大会の参加者についてはラサール陣営からの反論 (Th. Müller, Arbeitertag, 17. Mai, im Saalbau zu Frankfurt a. M. Einige Zahlenlügen, in: *GRS* Bd.3, S.291-292) がある。
- (447) Versammlung der Arbeitervereine des Maingau's, in: *NFZ*, Nr.138, 19. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.67-68.
- (448) Versammlung der Arbeitervereine des Maingau's, in: *NFZ*, Nr.139, 20. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.71.
- (449) Lassalle, Arbeiterlesebuch, in: *GRS* Bd.3, S.181-250.
- (450) *Ebenda*, S.182.
- (451) Versammlung der Arbeitervereine des Maingau's, in: *NFZ*, Nr.138, 19. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.61-63.

- (452) Lassalle, Arbeiterlesebuch, in: *GRS* Bd.3, S.250.
- (453) Arbeiter-Angelegenheiten. b. Frankfurt, 20. Mai, in: *NFZ*, Nr.140, 21. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.77.
- (454) Lassalle, Arbeiterlesebuch, in: *GRS* Bd.3, S.251-288.
- (455) *Ebenda*, S.289.
- (456) R. Baist u.a., Arbeiter-Angelegenheiten, in: *Nordstern*, No.123, 23. Mai 1863.
- (457) Lassalle, Arbeiterlesebuch, in: *GRS* Bd.3, S.289.
- (458) Ebeling, *Der Kampf*, S.64 および S.77 を見よ。
- (459) Arbeiter-Angelegenheiten. b. Frankfurt, 20. Mai, in: *NFZ*, Nr.140, 21. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.83-84.
- (460) *Ebenda*, S.84.
- (461) *Ebenda*, S.84-85.
- (462) *Ebenda*, S.85.
- (463) *Ebenda*, S.65.
- (464) たとえばメーリングは5月19日の労働者集会を「第2回集会」とよび(足利他訳『ドイツ社会民主主義史(下)』76頁)、アンドレアスはこの日の講演をフランクフルト労働者教育協会の講演のように扱っている(Andréas, *Lassalle. Bibliographie*, S. 104, A66)。
- (465) 小論第3節(iii)のd、本誌第26巻100頁を見よ。
- (466) Lassalle an Lewy, 9. März 1863, in *NBS*, Bd.5, S.110.
- (467) Lassalle, Arbeiterlesebuch, in: *GRS* Bd.3, S.288.
- (468) この点は、篠原「反語家としてのラッサール(上・下)」、法政大学教養部『紀要』第82号(1992年2月)、同第86号(1993年2月)所収、を見られたい。
- (469) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.43.
- (470) Frankfurt a. M., 18. Mai. Er war hier ..., in *VZ*, No.115, 20. Mai 1863.
- (471) — Arbeiter-Angelegenheiten. Der Vorsitzende des Central-Komité's ..., in *VZ*, No.122, 29. Mai 1863.
- (472) Ebeling, *Der Kampf*, S.64-65.

- (473) Der Arbeitertag zu Frankfurt a. M., 17. Mai, in: AZ, Nr.22, 31. Mai 1863.
- (474) — Arbeiter-Angelegenheiten. Auf der am 23. in Leipzig .., in VZ, No.122, 27. Mai 1863.
- (475) Leipzig, 26. Mai. Die Versammlung zur ..., in: AZ, Nr.23, 7. Juni 1863は*Die Konstituierung*, Dok.86, S.538-542 と同じ記事である。
- (476) Die Constituirung des sogenannten deutschen Arbeitervereins. — in Leipzig, 23. Mai, in: NFZ Nr. 148, 30. Mai 1863, nach: Ebeling, *Der Kampf*, Abb.I und II.
- (477) VZ, No.126, 3. Juni、No.127, 4. Juni、VZ, No.128, 5. Juni および VZ, No.130, 7. Juni を見よ。
- (478) Versammlung der Arbeitervereine des Maingaues, in: NFZ, Nr.138, 19. Mai 1863, zitiert nach: Ebeling, *Der Kampf*, S.71.
- (479) Mainz, 21. Mai. Der „Mainzer Anzeiger“ ..., in: AZ, Nr.22, 31. Mai 1863.
- (480) Die Constituirung, in: NFZ, Nr.148, 30. Mai 1863, nach: Ebeling, *Der Kampf*, Abb.I.
- (481) Ebeling, *Der Kampf*, S.35 を見よ。
- (482) Leipzig, 26. Mai. Die Versammlung zur ..., in: AZ, Nr.23, 7. Juni 1863.
- (483) Die Constituirung, in: NFZ, 30. Mai 1863, nach: Ebeling, *Der Kampf*, Abb.I.
- (484) Leipzig, 26. Mai. Die Versammlung zur ..., in: AZ, Nr.23, 7. Juni 1863.
- (485) Die Constituirung, in: NFZ, 30. Mai 1863, nach: Ebeling, *Der Kampf*, Abb.II.
- (486) *Ebenda*, Abb.II.
- (487) Leipzig, 26. Mai. Die Versammlung zur ..., in: AZ, Nr.23, 7. Juni 1863.
- (488) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.44.
- (489) Provisorische Grundzüge des Geschäfts und Verwaltungsreglements, in: *GRS* Bd.4, S.251-254.
- (490) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.71 を見よ。
- (491) Lassalle, Instruction für die Bevollmächtigten des Allgemeinen Deutschen Arbeiter-Vereins, in: *GRS* Bd.4, S.255-258.
- (492) Lassalle, Bekanntmachung, in: *GRS* Bd.4, S.259-260.

- (493) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.57 を見よ。
- (494) Ebeling, *Der Kampf*, S.144.
- (495) — Herr F. Lassalle ..., in: VZ, No.151, 2. Juli 1863 を見よ。
- (496) Vahlteich an Lassalle, 27. August 1863, in: Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S. 81.
- (497) *Ebenda*, S. 82.
- (498) Lassalle an Vahlteich, 29. August 1863, *ebenda*, S. 82.
- (499) *Ebenda*, S. 83.
- (500) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.83 を見よ。
- (501) Lassalle an Herwegh, 31. August 1863, in: M. Herwegh (Hg.) : *Ferd. Lassalle's Briefe an Georg Herwegh*, Zürich 1896, S.77.
- (502) [Adresse rheinischer Arbeiter an Lassalle], in: *Die Konstituierung*, Dok.95a-95b, S.318-327. また Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.86 も見よ。
- (503) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.83, Anm.\*) を見よ。
- (504) Lassalle, Die Feste, die Presse und der Frankfurter Abgeordnetentag, in: *GRS* Bd.3, S.394.
- (505) Reiner Rhexus, Hugo Hillmann (1823-1898), in: *Geschichte im Wuppertal*, 7.Jg., 1998, S.26 を見よ。
- (506) Lassalle, Die Feste, in: *GRS* Bd.3, S.396.
- (507) メーリング『ドイツ社会民主主義史(下)』第3篇第2章(68-112頁)のタイトル。とくに 71-92 頁を見よ。
- (508) Lassalle, Die Feste, in: *GRS* Bd.3, S.386 を見よ。
- (509) Andréas, *Lassalle.Bibliographie*, A 73, S.113 を見よ。
- (510) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.108.
- (511) Lassalle, Die Feste, in: *GRS* Bd.3, S.396.
- (512) Lassalle an Herwegh, 8. Okt. 1863, in: *Lassalle's Briefe an Herwegh*, S.78-79.
- (513) Ed. Bernstein, Vorbemerkung, in: *GRS* Bd.2, S.287-290.
- (514) Zirkular, in: *GRS* Bd.4, S.261-262.

- (515) *Ebenda*, S.262.
- (516) さしあたり、篠原「反語家としてのラッサール(下)」、法政大学教養部『紀要』第86号、24-25頁を見よ。
- (517) Lassalle an Dammer, Ende Okt. 1863, in: Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.112.
- (518) Lassalle an Sophie von Hatzfeldt, [19. Okt. 1863], in *NBS*, Bd.4, S.348.
- (519) Lassalle, An die Arbeiter Berlins, in: *GRS* Bd.4, S.17-48.
- (520) *Ebenda*, S.55.
- (521) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.110.
- (522) *Ebenda*, S.112.
- (523) Andréas, *Lassalle.Bibliographie*, A 77, S.116-117 を見よ。
- (524) Allgemeiner deutscher Arbeiterverein. Berlin, den 26. Octbr., in: *Nordstern*, No.237, 7. Nov. 1863.
- (525) Die erste Sitzung des allgemeinen deutschen ..., in: *VZ*, No.252, 28. Okt. 1863.
- (526) Berlin, 27. Oct. Die erste Sitzung des ..., in: *AZ*, Nr.45, 8. Nov. 1863.
- (527) +Ueber die zweite Sitzung des allgemeinen ..., in: *VZ*, No.258, 4. Nov. 1863.
- (528) Berlin, den 11. November. Gestern ..., in: *Nordstern*, No.239, 21. Nov. 1863.
- (529) †Während die erste Sitzung ..., in: *VZ*, No.266, 13. Nov. 1863.
- (530) Lassalle an den Polizeipräsidenten von Bernuth, 15. November 1863, in: Gustav Mayer, *Bismarck und Lassalle*, 1928 Berlin, S.77.
- (531) †Am Sonntag sollte im Eldorado ..., in: *VZ*, No.269, 17. Nov. 1863.
- (532) Lassalle an Lewy, 20. Nov. 1863, in: Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.115.
- (533) Allgemeiner deutscher Arbeiterverein. Berlin, den 21. November., in: *Nordstern*, No.240, 28. Nov. 1863.
- (534) †Gestern (Sonntag Mittag) wurde eine ..., in: *VZ*, No.275, 24. Nov. 1863.
- (535) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.117-118 を見よ。
- (536) Allgemeiner deutsch. Arb.-Verein. [F. Lassalle], Arbeiter! ..., in: *VZ*, No.279, 24.

Nov. 1863.

- (537) Allgemeiner deutscher Arbeiterverein. Berlin, den 6. Decbr., in: *Nordstern*, No.243, 19. Dez. 1863.
- (538) Berlin, den 14. Decbr., in: *Nordstern*, No.243, 19. Dez. 1863.
- (539) Berlin, den 27. Decbr., in: *Nordstern*, No.244, 2. Jan. 1864.
- (540) Allgemeiner deutscher Arbeiterverein. Berlin. In der am 10. Januar..., in: *Nordstern*, No.246, 16. Jan. 1864.
- (541) *Ebenda*.
- (542) [Lassalle, Zirkular an sämtliche Vorstandsmitglieder vom 11. Januar 1864], in: Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.176.
- (543) *Ebenda*, S.176.
- (544) *Ebenda*, S.176.
- (545) Bernhard Becker, *Der große Arbeiter-Agitor Ferdinand Lassalle*, Frankfurt a. M. 1865, S.46.
- (546) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.300.
- (547) Lassalle, Zirkular an sämtliche Vorstandsmitglieder vom 27. Juli 1864, in: *GRS* Bd.4, S.298.
- (548) この時期のラサールの活動については、メーリング『ドイツ社会民主主義史(下)』97 - 118 頁を参照されたい。
- (549) Becker, *Geschichte der Arbeiter-Agitation*, S.120.
- (550) *Ebenda*, S.119.
- (551) 篠原「ベルリンとラサール」、石塚他編『都市と思想家 II』122-129 頁を見よ。
- (552) Mayer, *Bismarck und Lassalle*, S.80-84 を見よ。
- (553) Lassalle an Sophie von Hatzfeldt, 28. Juli. 1864, in *NBS*, Bd.4, S.370.